

2：中東以外の世界

翌日、ひかりの家。ひかりお手製の料理で、昼のひと時を過ごす。

建：昼から出汁巻きに蕎麦とは意気だな…。おっ、滅多に手に入らない九平次（名古屋市大高＝尾張氏筆頭田島氏の本拠地の名酒）もあるじゃないか！

ひかり：どう？

建：うん、たっぷりと出汁を含んでうまく焼けている。腕を上げたね。それに、九平次なんていうのは最高じゃないか！

ひかり：ありがとう！ところで、今日は何の話をしてくれるの？

建：今日は中東以外の世界に目を向けるよ。そして、いよいよ日本への渡来だよ！

(1) 支那

ここまではいわゆる四大文明の内、メソポタミア（シュメール）、エジプト、インダスを主に見てきたが、地続きの支那でも当然シュメールの流れがあった。それは黄河・長江・遼河文明とまとめて言われる中華文明である。

夏、殷、周と続く文明の中で、夏と殷の時代にあった蜀はシュメールの影響が濃い。この地域は4つの川（岷江、沱江、嘉陵江、烏江もしくは大渡河）に囲まれた地域で、後の四川省に相当する。ここでは金が重要視され、その後の楚の時代には、天狗のような羽人と呼ばれた仙人の根源も登場した。

支那の地には多くの国々が現れては消えたが、初めて国家として統一されたのは、ペルシャに居た十支族の系統の始皇帝の時代である。それは、四川省に隣接する王都で、市街地の様相や制度などはペルシャそのものだった。

その後、道教の元となった仙術を扱う方士、徐福が始皇帝の命令で不老不死の妙薬を求め、一団を率いて日本に渡来した。

ひかり：4つの川と言えば、チグリス、ユーフラテス、ピション、ギホン川に囲まれたエデンの園と同じよね？

建：そういう所に導かれて住み着いた。

ひかり：導きの神、ニンギシュジツダね…。金が重要視されたのもシュメールと同じね。天狗のような羽人って、ひょっとして烏天狗の根源なの？

建：言うまでも無いだろ？

ひかり：だからと言って、そこから直接来たわけではなく…

建：うん…

ひかり：シュメールの影響を暗示させるために拝借した！

建：支那では8が最も演技の良い数字ということは…

ひかり：支那でもイナンナの影響が大きいわけね！

建：それがやがて、大陸全土に広がっていった。特に、西王母伝説はその典型だな。

ひかり：西王母って、すべての女仙たちを統率する女鬼神のような存在でしょ？

建：「山海経」に依れば、人間の女の顔に獣（虎の類など）の体、蓬髪（乱れた

髪)に玉勝(宝玉の頭飾)を付け、虎の牙を持ち、よく唸り、咆哮は千里に轟いて、あらゆる生き物を怯えさせ、蛇の尾を振れば、たちまち氾濫が起き、また西王母には大黎、小黎、青鳥という3羽の猛禽が従っていて、王母の求めに応じて獲物を捕らえ、食事として捧げる、とある。これが“天厲五残(疫病と5種類の刑罰)”を司る鬼神と言われた西王母の大元で、人間の非業の死を司る死神だったんだ。

それが次第に“死を司る存在を崇め祀れば、非業の死を免れられる”という、恐れから発生する信仰によって、徐々に“不老不死の力を与える神女”というイメージに変化していった。やがて、道教が成立すると、西王母はかつての“人頭獣身の鬼神”から“天界の美しき最高仙女”へと完全に変化し、不老不死の仙桃を管理する、艶やかにして麗しい天の女主人として、絶大な信仰を集めるようになったんだ。王母へ生贄を運ぶ役目だった青鳥も、“西王母が宴を開く時に出す使い鳥”という役に姿を変え、やがては青鳥と言えば“知らせ、手紙”という意味に用いられるほどになった。

ひかり：容貌が女の顔、獣の体、虎の牙、蛇の尾なら、これでメルカバーを形成するわ！

建：そう、カバラさ！死を司る冥界の女神と見なされたのは、イナンナの冥界下りに登場した姉のエレシュキガルだが、カバラを操れるのは、知識の“メ”をエンキから手に入れた知恵の女神イナンナだよ。

ひかり：やっぱりイナンナなのね！

建：うん、イナンナはシヴァ神の分身の1つ、暗黒のカーリーでもあり、宗教に於ける暗黒の側面の原型となったことは、前にも言ったよね？これが、“人頭獣身の鬼神”の意味するところなんだ。

ひかり：イナンナは美の女神ヴィーナスでもあるから、“天界の美しき最高仙女”でもあるのね？

建：支那から見て、シュメールやイナンナが主神だったインドやペルシャはどこらにある？

ひかり：西…あっ、だから“西の王母”となって西王母なんだ！

建：後に、この西王母が七夕の織姫となった。

ひかり：えっ！そうなの？そうすると、相手の牽牛はドゥムジ？

建：その通り！ドゥムジはニビルから羊を降ろして牧羊・牧畜に携わっていたから牽牛に相応しいし、イナンナは牡牛に喩えられたエンリル側だしね。

ひかり：そうすると、イナンナはウヌグ・キの神聖な区域に“ギグヌ(夜の愉しみの家)”を設置し、それとは別に、王たちと一緒に新年の祝いの儀式も行うようになったから、…これらが変遷して、年に1回、イナンナとドゥムジが逢瀬する、という逸話になったわけ？

建：そういうこと。

ひかり：西王母がイナンナで織姫なら、機を織る女性の原型がイナンナということになるわ。そして、高天原で機織りしていたのは女神の天照大神だから、その原型はイナンナなのね！

建：ようやく見えてきたようだね。そして、そこにはヒッタイトの“太陽女神”の概念も合わされている。イナンナは豊穰神の豊受大神でもあるから、外宮

の豊受大神と内宮の天照大神は元々1つだった、とも言えるわけさ。あるいは、太陽神ウツはイナンナと双子だったから、一心同体とも見なせる。

ひかり：(あっけにとられ) カバラって、奥が深すぎる…。

建：また、西王母は不老不死の仙桃を管理していて、桃は“兆しの木”という意味だが、西王母がイナンナである以上、それは“死んだはずの者が蘇った、復活の兆しの木”ということなので、「生命の樹」の暗示なんだよ。

ひかり：死んだはずのイナンナが蘇ったから、黄泉帰りの原型はイナンナの冥界下りで、それがイザナギが黄泉の国から帰る神話に反映されている。その時、鬼に追われた際に邪気を祓うために投げつけたのは桃だから、それはイナンナと「生命の樹」を暗示していたわけか…。

建：他にも、節分の追儺祭では、3人の神職がそれぞれ3回ずつ、桃弓で葦(よし)矢を放って魔を祓うが、これなどもその派生だよ。旧暦では立春から春が始まるから、節分はいわば大晦日に相当する。だから、大祓の意味合いがある。

ひかり：“3人の神職がそれぞれ3回ずつ”というのは“3×3”で「生命の樹」の三神三界、桃はイナンナの暗示で、葦は生い茂っていたシュメールを暗示するわね！

建：(頷く。) だから、支那にもシュメールの影響が多大、ということさ。ついでに言うと、弓は射手座が充てられている軍神ニヌルタの暗示だよ。“邪悪な蛇”マルドゥク一派を木端微塵に粉碎したからね。それが“魔を祓う”ということさ。だから、神道ではしばしば弓が用いられる。

ひかり：そうすると、始皇帝も徐福も、イナンナが主神のペルシャ系ユダヤ人だったから、尚更シュメールの影響が強いわけね。道理で、イナンナに関わる不老不死の概念が濃厚なわけね？

建：ああ。だから、彼らよりも先に渡来していたエフライム族と和平を結ぶことができ、新たな国造りが始まったのさ。

(2) 環太平洋文明圏

中近東からインドにかけては古代核戦争の影響があったが、大洪水後にカ・インの子孫が広がって行った環太平洋地域にはその影響は無かった。そのため、この地域は大洪水後に独自の発展を遂げた。南米からニヌルタとエンリルがニビルに金を送っている間、マルドゥクと喧嘩別れしたニンギシュジッタが信奉者を引き連れ、オルメカ文明を創成した。彼らが現地人(カ・インの子孫)を指導し、それが後にマヤ文明やアステカ文明へと発展し、ニンギシュジッタは“翼のある蛇”ケツァルコアトルとして崇められた。この文明の担い手たちは、発達した海運力で環太平洋の各地域で文明を築いた。

中南米の反対側にあたる古代日本列島は、とりわけ大洪水の影響が小さかった。そのため、古代縄文王国が開いていたのである。この列島は火山列島で時折大きな地震が発生するが、このような地殻構造により治癒力のある天然の温泉が湧き出で、また、季節的に大きな嵐に見舞われたりするものの、それが豊かな水量をもたらし、氾濫で土地が肥沃になるサイクルが出来上がっていた。

何よりも、四方を海に囲まれ、豊富な森林に恵まれた温暖な気候は清浄な飲み水を絶えずもたらし、四季の恵みを与えてくれるのだった。

すなわち、後に日本と呼ばれることになるこの列島は、地球のエネルギーグリッド（網）とエネルギーラインが同時存在する極めて稀な場所であり、それ故に、地球の意識（ガイア）エネルギーだけではなく、“万物の創造主（宇宙創造のエネルギー）”とも共鳴している極めて重要な場所であった。それを知った天才科学者ニンギシュジツダは、過去の地殻変動や太陽活動から遠い未来を予測計算し、密かにこの星の将来に備えて古代縄文文明を花開かせ、更に後にシュメール王家の血統の一族をこの地に導き、弥生文明を花開かせた。

ひかり：環太平洋文明圏はカ・インの子孫たちの文明だったのね！

建：ああ。太平洋にあったとされる、いわゆるムー大陸は誤解や妄想が生んだ産物だが、この一大文明圏を“ムー文明圏”と言うことはできる。この文明圏のあちこちで、共通のペトログラフが発見されていることは、一大文明だった証拠だよ。しかも、古代シュメール象形文字に類似しているしね。

ひかり：シュメールを中心とした地域ではマルドゥク一派の反乱によって言語がバラバラにされたけど、この文明圏はかなり長い間、言語は統一されていたわけね。普通はマヤとかアステカばかり注目されるけど、本当は縄文文明こそ、隠された最高の文明のような気がするわ。

建：その通り！1万年も前の磨製石器が日本列島から見つかっていることなどは、それを裏付ける。また、縄文土器は食物を煮炊きできる道具だから、シュメールで文明が開く前から、かなり高度な文明の基礎が出来上がっていたと言える。他に、そんな所は見つかっていない。

ひかり：じゃあ、縄文の王は誰だったの？記録なんて何も無いわ！

建：竹内文書がある、という人もいるが、それはアダム誕生以来の人類の血統の歴史、とも解釈が可能だから、必ずしも古代日本列島の王家の歴史とはいえない。邇邇芸命（ニニギノミコト）を秦氏の大王とするなら、ニニギよりも前に天孫降臨していた饒速日命（ニギハヤヒノミコト）を物部氏の大王と見なすことができる。そのニギハヤヒよりも前から居たのは？

ひかり：確か、長髓彦（ナガスネヒコ）よね…ニギハヤヒがナガスネヒコの妹の登美夜毘売（トミヤヒメ、日本書紀では三炊屋姫（ミカシキヤヒメ））を娶った。

建：ニニギは山の神・大山祇神（オオヤマツミノカミ）の娘・木花咲耶姫（コノハナサクヤヒメ）を娶って火火出見（ホホデミ）を産み、ホホデミは海神・綿津見神（ワタツミノカミ）の娘・豊玉姫を娶って鵜草葺不合命（ウガヤフキアエズノミコト）を産んだ。これにより、天孫には高天原の神、大地の神、海の神の霊力が宿り、ようやく大八洲（オオヤシマ：日本）を治める資格を得たわけだ。これはつまり、自分には無い重要な性質を有する大王の娘を娶って和平を結んだと見なせる。そうすると、天孫ニギハヤヒがミカシキヤヒメを娶ったことは…

ひかり：ナガスネヒコが縄文王国の大王だったわけね！

建：正解！ナガスネヒコは文字通り“脛の長い”という解釈もできる。実際、中南米では背が高く脛の長い人骨が埋葬されていたから、環太平洋文明圏は人種的にも同族だったという証拠だよ。それに、縄文人は山の民でもあり、後にサンカと呼ばれた。山の神はオオヤマツミノカミだが、海神でもある。それは、縄文人が海の民でもあるからなんだ。

ひかり：太古は、世界中の何処もが豊穡の女神を崇めたわよね。それと恵みをもたらす太陽も。イナンナは放浪が好きだったから、当然、環太平洋地域へも行ってたことは想像に難くないわ。

建：世界中へ、さ！イナンナの亦名はアシェラで、ヘブライ語の“柱”という意味でもあるから、ついつい古代ヘブライの関係などと考えられていた。しかし、フェニキアのところでも話したように、原型はイナンナだ。インディアンのトーテムポール、諏訪大社の御柱など、環太平洋地域では至る所で柱が神の依り代、あるいは神聖な場所の結界と見なされてきた。そして、蛇が神の使いあるいは神自身とされた。

ひかり：諏訪大社の根源は蛇神のミシャグジ様だけど、ヒッタイト神話ではイナンナが悪龍イルルヤンカシュ（マルドゥク）を退治したから、いわばイナンナは“良い蛇”ね。そして、双子のウツにも蛇に関わる伝承があって、何と言っても、導きの神ニンギシュジッダは蛇神だわ！そうそう、それからニンギシュジッダの父で海神で地球の主エンキこそ、すべての蛇神の根源よね。

建：そう、彼らに関わりがあるからこそ、蛇神さ。ミシャグジ＝ミシャグチを“御イサク地”と見なし、御頭祭と合わせてイサクを救う場面の再現、なんて言う人もいたけど、それは最表面だけのこと。根底は“神の社に仕えて神懸かりするサニワ”ということで“御社宮司”なんだ。柱に蛇が絡まれば…

ひかり：「生命の樹」ね！それと対を成すのは「知恵の樹」で、両者は「合わせ鏡」！

建：そうさ。そして、それらを1つにまとめて2匹の蛇が絡まればカドゥケウスの杖でニンギシュジッダのシンボル。中南米はニンギシュジッダが主神だったから、翼のある蛇神、白く輝く蛇神が男神の太陽神として崇拝された。だから、例えばインカでは、神に仕える巫女は冬至の日に、陰部を日の出の太陽に向けて太陽神の子を宿すとされた。似たような話は、古事記にも天之日矛（アメノヒホコ）に関わる阿加流比売（アカルヒメ）の話がある。

“昔、新羅のアグヌマ（阿具奴摩、阿具沼）という沼で女が昼寝をしていると、その陰部に日の光が虹のようになって当たった。すると女はたちまち妊娠して赤い玉を産んだ。その様子を見ていた男は乞い願ってその玉を貰い受け、肌身離さず持ち歩いていた。ある日、男が牛で食べ物を山に運んでいる途中、アメノヒホコと出会った。アメノヒホコは、男が牛を殺して食べるつもりだと勘違いして捕えて牢獄に入れようとした。男が釈明をしてもアメノヒホコは許さなかったので、男はいつも持ち歩いていた赤い玉を差し出して、ようやく許してもらえた。

アメノヒホコがその玉を持ち帰って床に置くと、玉は美しい娘になった。ア

メノヒホコは娘を正妻とし、娘は毎日美味しい料理を出していた。しかし、ある日、奢り高ぶったアメノヒホコが妻を罵ったので、親の国に帰る、と言って小舟に乗って難波の津の比売碁曾（ひめこそ）神社に逃げた。アメノヒホコは反省して、妻を追ってヤマトへ来た。この妻の名はアカルヒメである。しかし、難波の海峡を支配する神が遮って妻の下へ行くことができなかったので、但馬国に上陸し、そこで現地（出石）の娘、前津見と結婚した。”

ひかり：新羅も関係しているなんて、興味深いわ！

建：何と言っても、新羅は海宮一族が建国に携わった国だからね！

ひかり：！？

建：まあ、それはそうとして、そのインカの話では、巫女は毛抜き用ピンセットで陰毛を抜かれ、搔把器で陰部を開いて太陽に向けられた。

ひかり：まあ！

建：その毛抜き用ピンセットに似た物が、日本にもある！

ひかり：何なの？

建：宮中の新嘗祭などで使われる、神饌をお供えする箸さ。竹を曲げてピンセット状になっている。

ひかり：箸というと、スサノオが出雲に降りた時に斐掛川に流れてきた箸の話とか、倭迹迹日百襲姫（ヤマトトヒモツヒメ）が陰部を箸について死んだ話とかあるわ。また箸ではないけれど、天照大神あるいは機織り女の稚日女（ワカヒルメ）が機を織っていた時にスサノオが皮を剥いだ馬を投げ入れたのに驚いて梭（ひ）でホト（陰部）について死んだ、なんていう話もあるわ。確か、その機を織っていた時の話は新嘗祭の時だったと思うけど…。

建：古代の新嘗祭は、ほぼ冬至の頃だった。

ひかり：えっ！？そうか、だから新嘗祭で使うピンセット状の箸は太陽神の子、日の皇子を暗示しているわけね！

建：（頷く。）

ひかり：それに、ワカヒルメの話の“梭”は“日”に通じるわ。インカと日本にはそんな繋がりもあったのか…。けど、太陽神ウツが直接関与していたわけではないのね？

建：マヤ文明などでは20進法だから、数字のカバラからすれば太陽神ウツを暗示する。しかし、彼の地で20進法を始めたのはニンギシュジツダで、主神もそうだ。つまり、太陽神の性質も併せ持つニンギシュジツダだからこそ、そこに太陽神ウツのシンボルが重なっても矛盾しない。これがカバラの難しい点でもある。

ひかり：そうすると…日本ではニンギシュジツダは導きの猿田彦で、縄文時代の土偶には明らかに豊穰の女神を模したものが多く、太古から続く諏訪大社などを見ると、…やはり縄文の最高神はイナンナで、ニンギシュジツダが裏から支えた、という構造が見えてくるわ！

建：ドゥルガーを覚えているかい？

ひかり：あっ、そうか、ドゥルガーはイナンナそのもので、獅子を従えた美し

い女神で航海の神だから、イナンナは航海の女神でもある！そうすると…海洋民たる縄文人を導いていたのは、豊穰の女神で航海の女神でもあるイナンナということね！

建：それをニンギシュジツダが助けたのさ。

3：日本への移住

食後のお茶には、建の買ってきた某老舗の粽。粽は支那由来の菓子で、季節柄、粽は合わないように思えるが、笹には祓の力があるとされ、祇園祭でも供えられる。

ひかり：笹の枚数が多いから、葛製の粽にしっかり香りが移っていて美味しい！

建：この老舗は、お茶会の注文がある時以外は、普段は粽とお干菓子しか作っていない。しかし、明治時代までは毎朝、塩餡を包んだ餅を宮中に献上していたんだ。その餅は“お朝物”と呼ばれ、後に朝餉（あさがれい）の儀として形式化し、明治天皇が東京に移られるまで続いたんだ。京都御所には、建礼門の東横にこの老舗の名を冠する専用門が今も残っているよ。

ひかり：そんな有り難いお店のお菓子なのね、ありがとう。

建：ちなみに、茶道は誰が始めた？

ひかり：千利休よね？

建：お茶はお寺が主体と思っている人が多いが、神社の御神事でも供えられる。

また、茶菓子の元は、小麦粉を練ってクレープ状に焼き、西京味噌を塗った麩の焼きなんだ。つまり、酵母を入れずに焼いたパンと同じさ！

ひかり：ということは、…ひょっとして、お茶はワインの代わり、てこと？

建：(微笑む。)

ひかり：そうしたら茶道って、キリスト教の聖体拝領の暗示なの？

建：だから、創始者は使徒ルカ、サン・ルカに因んだ名前なんだよ！

ひかり：道理で、お茶室の躡（にじ）り口は狭いわけか…。

“イエスは町や村を巡って教えながら、エルサレムへ向かって進んでおられた。すると、

「主よ、救われる者は少ないのでしょうか？」

と言う人がいた。イエスは一同に言われた。

「狭い戸口から入るように努めなさい。言うておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまってからでは、あなたがたが外に立って戸をたたき、『御主人様、開けてください』と言っても、『お前たちがどこの者か知らない』という答えが返ってくるだけである」

(ルカ 13 章 22～25 節)”

(1) エフライム族の渡来

中東では、もはや神々はほとんど姿を見せなかった。その神々のエゴを人類は背負うことになったので、中東や大陸では様々な国が戦い、それぞれの領土

を広げては奪われていた。イスラエルも例外ではなく、王国は分裂し、北イスラエル王国はエフライム族が、南ユダ王国はユダ族が中心となって治めていた。この頃の北イスラエル王国は本来のシュメール信仰に戻って多神教となり、サマリア“小さなシュメール”と呼ばれていた。しかし、度重なる侵略によってサマリア王国の十支族は捕囚された後に行方不明となり、戻って来なかった。

その頃、古代日本は縄文時代末期で、環太平洋文明圏の中心地となって最高の栄華を極め、大王ナガスネヒコが治めていた。そこにある時、イナンナとニンギシュジツダの御宣託によって導かれたフェニキアの大船団が渡来した。行方不明となっていたサマリア王国の十支族である。

彼らはまず先発隊として、祭司氏族のレビを偵察隊として送り込んだ。導かれたとはいうものの、本当に神祭りに相応しい土地かどうか、判断するためである。その到着地点は、後に丹後半島と言われる日本海側の土地だった。黒潮から分かれた対馬暖流の流れるその土地は、冬場は荒れるものの、四季を通じて豊富な海の恵みをもたらした。また、海岸からすぐ傍に山が迫っていたが、それが海に豊富な栄養をもたらし、山中や頂には巨大な磐座の祭祀場があった。そして、対岸の半島とも盛んに交易が行われていたが、そこには鉄鉱石が豊富に埋蔵されていた。この日本海側の地域は、この列島の中心地だったのである。人々の顔は一見、警戒心のある厳しい様相のように見えたが、実は温和な性格で、海と山の恵みに感謝する信仰深い人たちだった。

レビの長であるカグが彼らに話しかけると、それはサマリア王国の古い言葉、シュメール語と極めて類似したものだった！聞くと、彼らの実質の最高神は、何と偶然にも、豊穰の女神で航海の女神イナンナだった。そして、太陽神と蛇神を祀ると共に、海神で地球の主エンキも祀っていた。

カグが大王ナガスネヒコから詳しい話を聞くと、彼らはアダパの子カ・インの子孫であり、自分たちの遠い祖先サティの兄の系統で、遠い兄弟支族ということが解った。祀っている神、そして祖先の共通性から、その場で協調関係が結ばれ、エフライム族の本体が渡来しても良いこととなった。

この情報は直ちにエフライム族本体に伝わり、大船団は黒潮に乗って、まずは後に日向と呼ばれる地域に辿り着いた。そこには、ナガスネヒコの美しい妹、始良依姫（アイラヨリヒメ）が待っていた。潮流の流れを見て到着地点を確信したナガスネヒコから、派遣されていたのである。彼女に先導され、エフライム族の本体は瀬戸内海を通り、現在の大阪・住之江付近に上陸し、陸路を経て、丹後で合流した。美しさと大船団を先導するたくましさを兼ね備えたアイラヨリヒメに、エフライム族の大王ムラクは心惹かれた。

ムラクは王権の印として見事な鉄剣を帯同し、神の依り代としてのアロンの杖を持っていた。これを見たナガスネヒコは即座に悟った。自分たちもアダパの直系の子孫だが、神が望んでいるのは言わば弟分の彼らだと。当時、縄文王国では鉄の技術は発展途上にあり、メインは銅剣だった。もし戦えば、まったく勝ち目は無い。また、祖先のカ・インの罪滅ぼしはとっくの昔に終わっていたが、やはり神は罪の無い一族をお望みで、それ故に御神託によってこの土地

まで彼らを導いて来たのだと。

このように、宗教戦争をすること無く、ナガスネヒコとムラクは正式に和平を結び、その証としてムラクはアイラヨリヒメを娶り、渡来した一族の高度な製鉄技術は縄文王国に譲渡されることになった。そして、ムラクはこの列島の正式な大王として認められ、新たな時代が始まった。

ひかり：神々は一応、人類に介入しないことを決めたわよね？

建：だから、どうしても、という時には、このように御神託という形をとって導いた。時には、天使などの姿として現れたりしたけどね。

ひかり：エフライム族の最初の到達地点は丹後だったのね？

建：今でこそ“山陰”と呼ばれて裏のような印象だが、当時の半島や大陸との交易は、こちらが表玄関だったんだよ。

ひかり：日向のあたりから大分の宇佐にかけては、比売大神（ヒメノオオカミ）が土着の神として祀られていたわよね？確か、宗像三神と同じだけど…。

建：大神という尊称は、極めて重要な神であることを意味する。最高神がイナンナだったということは…

ひかり：宗像三神はイナンナの分身、てことかしら？

建：シヴァの分身が航海の女神ドゥルガーと暗黒の女神カーリーならば、すべてイナンナで同一、ということさ！

ひかり：特に航海の女神という点で、ドゥルガーが反映されているわけね！

建：ああ。だから、宗像系と海宮系は広い意味では同族とも言えるんだよ。婚姻関係も結んでいるしね。

ひかり：そう言えば、宗像三神の一柱、市杵嶋姫（イチキシマヒメ）は後に仏教の弁天様と習合されて、水神にもなったわよね？ということは、三神の中ではイチキシマヒメが最も重要ということ？

建：そういうことだね。この場合の「水」は「生命の水」のことさ。そして、弁天は歌舞音曲の神でもあり、これはイナンナが原型の天鈿女命（アメノウズメノミコト）と同じだよ。その宗像三神を祀る宗像大社の海底神殿からは、興味深い一対の像が発見されている。



ひかり：変わった像ね？

建：銅製で、一対の片方は乳房と男性器を有した両性具有だ。最初の人類は遺伝子が欠損していたため、生殖能力が無かった。つまり、アダムとイブのアダムに相当する。もう一方は明らかに女性だからイブだ。この像は42センチで1キロ。42はカバラ的に $4+2=6$ で、神の数字は7だから、それに1足りない6は人間を表す。1は最初の数字だから、最初という意味。つまり、42センチと1キロで、最初の人類を暗示している！

ひかり：考古学者で、それに気付いた人は誰もいないわ！

建：人類を創成した神はエンキと彼の息子ニンギシュジッタ、そしてエンキと腹違いの妹ニンフルサグで、エンキが中心となった。そのエンキの象徴は海神・水神、水鳥、水瓶、

魚、蛇、亀だから、像の頭に乗った水鳥が、最初の人類を創成した神を暗示している。

ひかり：主エンキね？

建：すなわち一對の像は、地球の主エンキが人類を創成したことを暗示している！

ひかり：確か、エンキのあだ名は“銅の彼”でもあったから、銅製の像ということでもエンキを暗示しているわけね…完璧！

建：それが宗像大社の海底神殿から発見されたということは、宗像の本来の最高神、すなわち、「生命の樹」に於ける均衡の柱はエンキで、最も関わりの深い慈悲の柱がイナンナだったと言える。だから、共にイナンナを実質の最高神として祀ることで、新たな時代が始まった。

ひかり：大阪住之江の住吉大社は、神功皇后と共に、イザナギの禊で生まれた底筒男命（ソコツツノオノミコト）、中筒男命（ナカツツノオノミコト）、表筒男命（ウワツツノオノミコト）が西向きに祀られていたわよね？これって、宗像大社の方を向いて、宗像三神と「合わせ鏡」になっている気がするけど？

建：そう、宗像三神は女神でしかも西側だから陰、住吉三神は男神で東側だから陽で、対になっている。

ひかり：ということは、住吉三神は宗像三神よりも後から祀られたわけ？

建：良いことに気付いたね…住吉大社には神功皇后も祀られている。住吉大社の御紋は神宮の御紋とほぼ同じで、神功皇后が新羅遠征した際に身に付けていた鎧にあった御紋、と説明されている。しかも神宮と同じく、20年毎に式年遷宮が行われる！そして、日本書紀の一書には、神功皇后は卑弥呼かもしれない、と記載されている。そうすると…

ひかり：卑弥呼が関わってくるわけか…そう言えば、神功皇后と共にヒメノオオカミが祀られている宇佐神宮は豊国にあるから、トヨも関係ありそうね…。それに、神功皇后の“神功”は“神宮”と同じ読みだし。

建：それについては、邪馬台国建国のところで詳しく話そう。

ひかり：じゃあ、神の依り代としてのアロンの杖、てどういうこと？

建：それでは、この時点での祭祀を見てみよう。

(2) 新たな祭祀

ムラクがこの列島の正式な大王として認められてからの時代は、後世では弥生時代と呼ばれることになった。実質の最高神がイナンナで共通していたので、当然、この時代の実質の最高神もそのままイナンナで、とりわけ不老不死の概念が重要視された。そして、太陽神ウツ、蛇神ニンギシュジツダ、地球の主エンキが共に祀られた。ニンギシュジツダは導きの蛇神で、蛇神のエンキは本来の最高神だが、同じ蛇がシンボルということで、蛇は神の使いと見なされることが多くなった。

縄文人たちは、巨大な自然な磐座を神が降臨するジグラットと見立てて崇拝していた。中には、山自体がジグラット構造のピラミッドのものまで存在した。このような磐座や人工の山は、天才科学者ニンギシュジツダが地球のエネルギー

ーグリッドを測定して配置・建造させたものである。これにより、人々の祈りの想念の波動エネルギーがガイア意識と共鳴し、自然の大災害を防いでいたのである。そして、ガイア意識も人々の想念に働きかけ、完璧な共生社会が出来上がっていた。無論、一部の者を除いて、縄文人たちはそんな科学的背景は知らなかった。

渡来した一族も、ジグラットへの信仰は共通することから、この信仰は大切にして自分たちも踏襲した。後に仏教が伝来してからは須弥山（しゅみせん）や弥山（みせん）と呼ばれ、シュメールを暗示することになる巨大な磐座や山だが、この中の丹後にある最も重要なものの1つが、大神アヌと祭司カグに因んでアヌとカグの山、天香語山（あめのかごやま）と名付けられ、祭祀の拠点とされた。それと同時に、天神を祀る一族ということで一族の部族名は天宮（アマミヤ）とされ、ムラクは“天宮のムラク”ということで天村雲（アメノムラクモ）、カグは天香語山（アメノカグヤマ）へと、名前もこの国に相応しいものと呼ばれるようになった。

そこに、アロンの杖が神の降臨の依り代とされた。それまでは、磐座や山は大地から現れる神のシンボルだったが、そこに降臨の依り代が加わることにより、天から降臨する神（天神）と大地の神（地祇）の合一という陰陽の概念が出来上がったのである。このアロンの杖と共に、大王の持っていた王権の印としての鉄剣は、アロンの杖の分け御霊的存在として扱われるようになり、大王ムラクに因んで天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）と呼ばれるようになった。

また、シュメールでは王権のある土地の証拠として、光り輝く物が埋められていたが、この列島にはそれに相当する物が無かった。そのため、それに代わる物が必要とされた。

1つは、アメノカゴヤマなど神山と見なされた山の土である。しかし、これだけでは、他の土地の土と区別ができない場合がある。そこで、神山の土の分け御霊的存在の物として、土から産出する鉱石類が選ばれた。それは、カ・インの文明圏で不老不死と生命の再生をもたらす力を持つと信じられていた翡翠である。イナンナの影響は環太平洋地域全域に及んでおり、イナンナの不死鳥フェニックス由来のフェニキアの大船団で渡来した一族からすれば、これは願っても無いことだった。それを球ではなく、ヘブライ語の“YHWH”を意味するヤー、文字としては“Y”に相当するヨッド（'）の形に加工したのである。これが、王権のある土地の象徴とされた。そして、地球の主エンキに実質の最高神イナンナと双子の太陽神ウツが重ねられ、新たに“ヤー”として祀られるようになった。そのため、いつしかこの国は不老不死の妙薬のある国と噂されるようになり、最高峰の山は不死の山、蓬莱山と名付けられた。

.....
ひかり：蛇神は一柱ではないのね？

建：エンキとニンギシュジッタは勿論、邪悪な蛇マルドゥクに対する良い蛇イナンナ、ウツなどが重ねられている。

ひかり：日本にもピラミッドがあるってかなり以前から噂されていたけど、本当だったのね？

建：神の宮だからね。

ひかり：アロンの杖は木の杖だから、それが神が降臨する神籬の原型だったのね？

建：そうさ。アロンの杖は、聖書に於ける“族長の杖”に由来している。イスラエル十二支族の間で諍いが起きた時、主は各支族の族長の杖を契約の箱の前に置かせた。そして、主が選んだ杖には若葉が芽吹き、その族長に従わなければならない、と言われた。選ばれたのはレビ族のアロンの杖だった。それ以降、アロンの杖は契約の箱、マナの壺と共に、ユダヤ三種の神器となった。このように、アロンの杖は主が自ら選ばれたからこそ、神が降臨するための依り代、神が降臨できる神籬となり、芽吹いたアロンの杖の姿は、神に捧げる木＝榊の原型で「生命の樹」なんだよ。

ひかり：そうすると、縄文人とエフライム族は共に実質の最高神がイナンナだったから、降臨する神はイナンナで、木にイナンナが降臨すれば…あっ、「生命の樹」に掛けられたイナンナだ！

建：その通り、「生命の樹」に掛けられた蛇神だよ！

ひかり：それはまた、イナンナが原型のイエスが、十字架に掛けられた状態と同じ！

建：そのように、後に渡来する秦氏が仕掛けを施したのさ。

ひかり：とすると、…陰陽で言えば降臨する神は陽で、神が降臨する神籬は陰だから、その神籬たる柱のアロンの杖は陰よね？そして、天叢雲剣こと草薙神剣はアロンの杖の分け御霊だから、剣は象徴として陰となるわけね？

建：その通り。陽の天神を祀る陰の神器ということさ。つまり、この時から天神を祀るのに剣が必要とされたということ。

ひかり：そうすると、大地に打ち込まれる心御柱の原型はベテュルだけど、そこに更にアロンの杖が重ねられたということかしら？

建：そういう見方もできるし、サマリアではベテュルからアロンの杖へと変遷したという見方もできる。

ひかり：なるほどね…。ところで、神饌として必ず必要な水も、陰陽の陰で言えば陰よね？

建：そうだよ。それが何か？

ひかり：天叢雲剣という名前よ…。叢雲という以上、雨、つまり水に関わる…。

建：(にやりとして) 気付いたか…。記紀に登場する重要な水の名称は？

ひかり：何と言っても、天照大神とスサノオの誓約が行われた天真名井よね、海宮一族の奥宮の名称と一致する！

建：真名井は古くは“魚井”と書かれていた。魚も水も水瓶も、エンキを象徴しているよね？

ひかり：イナンナに「生命の水」を与えたのはエンキだったわ！それを暗示する名称ね？

建：そうさ。これが神饌としての水の根源。そして、丹後国一宮深秘には、豊

受大神が丹後に祀られた際、天真名井の水をアメノムラクモノミコトが汲み、それを神饌に使ったとある。

ひかり：アメノムラクモノミコトという御名は大王ムラクと天叢雲剣の暗示で、それはアロンの杖。そして、真名井の水は「生命の水」で、豊受大神はイナンナだから、まさにイナンナが木に掛けられて「生命の水」を与えられて“復活”したことを暗示しているわけね！

建：だから、最高神を祀るためには剣と水が欠かせないのさ。そして、さっき話した、ムラクが丹波入りした経路は神武天皇の東征経路にそっくりだろ？

ひかり：ひょっとして、神武天皇の大元のモデルはアメノムラクモノミコト？

建：その通り！神武天皇は後の神話に依る架空の人物だが、それに相当する大王は存在したということさ。

ひかり：剣を持っていて、その剣が祭祀に不可欠なものだったから、神の祭祀と武器を象徴する剣ということで“神武”なわけね？

建：名には、それなりの意味が込められている。

ひかり：海宮一族は元々は天宮一族だったの？

建：秦氏が渡来し、王権を委譲させられて以後、天神を祀る一族から海神を祀る一族へと変更させられたのさ。この詳細については後ほどね。

ひかり：アメノカゴヤマはシュメールの最高神アヌを祀る暗示だから、アヌから王権が認められた土地のシンボルと考えて良いわけね？

建：だから、後に持統天皇が万葉集に詠んでいるだろ？

“春過ぎて 夏来にけらし 白袴（しろたへ）の 衣ほすてふ 天香具山”

天香具山は聖なる山のはずなのに、洗濯物が干してあることなどおかしいよね？これは天香具山、つまりアメノカゴヤマの土を手に入れた者がヤマトの王になれたという意味さ。その原型はシュメールで、王権のあった場所は聖別され、そこの土にエンリルが“天空のように明るい物体”を埋め込み、それが転じて“輝く玉”となり、玉が王権の象徴となったわけ。

ひかり：それが勾玉なのね？

建：そう名付けられたのはもう少し後だけだね。そして、インダスで話したように、上向きの三角形プルシャと下向きの三角形プラクリティが変形されて巴になったわけだが、この巴の形も“Y”に相当するヨッド（'）の形だね。

ひかり：聖なる土の意味は解ったけど、衣は何を意味するの？

建：神聖な山に関わる“衣”は“天の羽衣”だよ。逸文風土記の奈具社条文には、丹波郡の比治の真名井という泉に天女8人が天降った話がある。天女たちは水浴びをしていたが、和奈佐という老夫婦がやって来て、天女たちが脱いでいた衣の1つを取って隠してしまっただがために、1人の天女は天に帰れなくなり、老夫婦の娘として共に十数年過ごし、その天女は万病に効く酒を醸していたという話。酒は水と共に神饌として供するだろ？つまり、その衣＝“天の羽衣”は天上界の力の象徴で、それを身に纏うことにより、神と直接対峙して神祭りすることが許されるということ。だからこの歌は、王権の象徴とも言える天香具山の土を手に入れ、神祭りが許される“天の羽衣”を

纏うことにより、名実共に祭司王となる持統天皇の野望を詠っているんだよ。
ひかり：へえ～、そんな歌だったんだ…。

建：ついでに言うと、大嘗祭に於いて天皇陛下（正確には皇太子殿下）がお召しになる湯帷子（ゆかたびら）も“天の羽衣”と言うんだよ。大嘗宮（悠紀殿、主基殿）に入られる前に、天皇は沐浴を行う。沐浴用の建物である廻立殿（かいりゅうでん）に入られた天皇は、天の羽衣を身に付けたまま湯槽に入り、湯の中に衣を脱ぎ捨てて出る。生の明衣（みょうえ）を着用して水を拭い、齋服に着替えて大嘗宮に向かう。これを、小忌御湯と言う。悠紀殿と主基殿で二度儀式があるので、廻立殿での入浴も2回、天の羽衣、生の明衣も2着ずつ用意される。

ひかり：これは湯帷子だから、天女の水浴を暗示していることは確かだけど、天女は羽衣を脱いで水浴したがために、天上に帰れなくなったでしょ？
けど、大嘗祭では“天の羽衣”を着て沐浴するのよね？

建：沐浴は神聖な禊であり、その場で“天の羽衣”をわざわざ身に付けるということは、天上界の力を身に纏うということさ。それにより、神と直接対峙して神祭りすることが許される。その後、天子の威霊を体得して正式な天皇陛下となられるわけだよ。

ひかり：そういうことね…。

建：こんな昔の伝承から、皇室の儀式は引き継がれているなんて、壮大だよな。

ひかり：ひょっとして、名古屋の老舗鰻屋さんの名前はこの蓬莱山から採ったわけ？

建：いや、あの近辺はかつて、南側は海だった。その海から尾張氏の祭祀場としての熱田の杜を眺めると、海に浮かぶ蓬莱山のように見えたから、あの地も蓬莱と呼ばれるようになったんだよ。

ひかり：ふ～ん。

(3) 徐福の渡来

古代日本で弥生時代が始まった頃、大陸ではペルシャ系十支族が最初の統一王国を築いた。秦である。この呼び名はイナンナの父神シン（ナンナル）に由来し、故にシンボルは月である。

この国には、東の海に浮かぶ不老不死の国の伝説が既に伝わっていた。とうの昔に神殿には神々はおらず、不老不死を神に直接祈願することはできなかった。秦の始皇帝は何としても不老不死の妙薬を手に入れたかった。そこで、レビの血を引く祭司、徐福を偵察隊の長として派遣した。そして、ある場合に備えて、皇帝の近親者も共に遣わした。

徐福一団は海流を利用して、最初に丹後に辿り着いた。そこで、一大王国を目にしたのである。最初、大王たちがシュメール語で話していたので徐福は良く理解できなかったのだが、ヘブライ語で話しかけると話が通じ、同じ十支族であること、そして、エフライム族の大王がこの地の大王として君臨しているとは思ってもみない大きな収穫だった。早速、このことを皇帝に伝えなければならなかったが、このまま戻ってしまえば、縄文の血を引く一族から敵と見

なされてしまう可能性もあった。この時、徐福は皇帝の機転を悟り、皇帝近親者の娘、伊加里姫（イカリヒメ）を大王ムラクへの和平の印として差し出し、彼女の側近や侍従らを残して、徐福は一旦秦に戻った。

アメノムラクモノミコトにはアイラヨリヒメという妻が居たので、イカリヒメとの関係をどうすべきか悩んだ。縄文王国との関係を優先すべきか、あるいは、十支族としての連帯を強くすべきか？また、アイラヨリヒメとの間には子を授かっていた。そこで、見かねたナガスネヒコが助け舟を出した。今後の大陸や半島との関わりを考慮すると、同族との繋がりを強くしては如何か？と。これによりアメノムラクモノミコトは決断し、イカリヒメを正妻とした。

一方の徐福は、残念ながら不老不死の妙薬は無かったものの、エフライム族の大王が彼の国を治めていること、最高神が不老不死の大元だったイナンナ故に不老不死伝説が出来上がっていたこと、和平を結ぶためにイカリヒメを大王アメノムラクモノミコトの妻としたことなどを皇帝に報告した。事情を理解した皇帝は、技術者などを集めて大集団とし、改めて徐福を指導者としてその一大集団を率いさせた。それは、始皇帝の遺言でもあった。

今度は彼らは半島経由で九州に上陸した。そこから次々と拠点を開き、瀬戸内海や四国、瀬戸内陸路を経て近畿へ、最終的に丹後へと合流した。そして、正式に和平が結ばれた。

あの最初の出会ってから十数年経っており、徐福はイカリヒメが正妻となっていることに安堵すると同時に、大王とイカリヒメの間にできた出石姫（イズシヒメ）に心惹かれた。大王は機転を利かし、徐福にイズシヒメを娶る意思があるかどうか尋ねた。徐福はその申し出を快く受け、イズシヒメを娶った。これにより、十支族の間の絆は深まった。

しかし、中には快く思わない人たちも居た。そもそもエフライム族との和平に疑問を抱いていた縄文王国の一部の者たちや、強引に拠点を築いていた一部の徐福一団の行動に納得できなかった者たちである。また、徐福の一団はペルシャ系ユダヤ人とは言え、ユダヤ教よりも契約の神ミスラを太陽神とするミトラス教に傾き、当時台頭していたゾロアスター教に押し出される形で大陸にあのような王国を築いたので、彼らの中にはイナンナを最高神とする縄文-エフライム族連合に納得できない者たちが居た。このような状況故、各地で小競り合いが発生し始めていた。それを少しでも収めるために、徐福一団が持って来た銅鐸を太陽神祭祀の祭具とした。銅鐸は太陽のように黄金色に光り輝き、その孔の位置は、夏至・冬至、春分・秋分を観測することができたので、太陽神の分身のように見なされていた。

.....
ひかり：支那の最初の統一王朝秦は、ペルシャ系十支族のユダヤ人国家だったのね？

建：だから、つい最近まで、始皇帝の墓を発掘することは許されていなかった。

支那最初の王朝が漢民族ではなかった、なんて、共産党の意向にそぐわない

からね。

ひかり：秦由来の渡来一族は弓月君に率いられて来たという伝承があったけど、弓月君が徐福なの？

建：そういうこと。弓のような月とは三日月でナンナルのシンボルだろ？それをカバラとして拝借したわけさ。そして、月に生えているとされる伝説の木があるだろ？

ひかり：確か…桂の木よね？桂の木…桂木…えっ、ひょっとして、謎とされている葛城氏の祖は徐福なの？

建：妻となったイズシヒメの正式名は？

ひかり：カツラギイズシヒメ！そういうことだったのか…。だから、葛城氏と海宮一族の分家の尾張氏との間には深い婚姻関係があるわけね。それにしても、徐福が海宮一族の大王に始皇帝縁者の娘を差し出したなんて、何処にも書いていなかったわよ！？

建：この国の封印された最高の秘密の1つだからね。正確に言うならば、実は史記に記されている。そこには、徐福は蓬莱の地で王となった、とある。

ひかり：大王アメノムラクモノミコトの義理の息子となったわけだから、確かに、王家の一員よね。このイズシヒメ、アメノヒホコの出石と関係ありそうね？

建：その通り！アメノヒホコは妻を追ってヤマトにやって来たが、但馬国の出石に至り、そこで現地の娘、前津見と結婚した。これは、アメノヒホコを徐福、出石や現地の娘をカツラギイズシヒメと見なせばいいんだよ。そして、アメノヒホコは8種ほどの神宝を持参したとされているけど、それらはいずれも海上の波風を鎮める呪具とされ、その中の奥津鏡＝息津鏡と辺津鏡は海宮氏の御神宝だから、アメノヒホコは海宮氏に極めて関係の深い人物なんだ。また、これらの神宝は物部氏の十種神宝を象徴するから、正史で物部氏の大王とされているニギハヤヒが持つべき物でもある。実は、ニギハヤヒも徐福なんだよ！このように、十種神宝という観点からも、アメノヒホコは徐福となるんだ。

ひかり：ニギハヤヒはニニギよりも先に渡来していた正統血統だから、海宮一族のことではないの？確か、あそこの極秘伝にもそんなようなことが書かれていたと思うけど…。

建：ニギハヤヒは徐福でもあり、海宮一族の大王でもある！シュメールの正統血統で、縄文の大王ナガスネヒコの妹を娶ったニギハヤヒは海宮一族の大王を暗示し、ナガスネヒコを裏切って神武天皇側に寝返ったニギハヤヒは徐福系なんだよ。海宮一族の極秘伝はこうある。

“ヤマトに於いて、天神の降臨が相次いで二度あった。最初の降臨は天火明命、天香語山命、天村雲命であり、少々経ってからニギハヤヒが降臨した。これは、古代に於いて、両氏族が相当深い関係にあったことを暗示している。”

ここでは明らかに天神には二氏族あって、両者が“相当深い関係”、つまり、婚姻関係で結ばれていたことが明白だよ。

ひかり：その場に依じてどう見るか、ということね？

建：ああ、そうだ。だんだんカバラの複雑さを読み解けるようになってきたね！

ひかり：ところで、タジマモリも不老不死の妙薬を求めたわよね？

建：タジマモリも徐福を暗示する！最初に渡来した時点の徐福が田道間守（タジマモリ）、再渡来した時点の徐福がアメノヒホコさ！

ひかり：タジマモリは確か第11代・垂仁天皇の命で常世の国に不老不死の妙薬、非時香果（ときじくのかぐのこのみ）を求め、10年掛けて葉付きの枝と果実付きの枝を日本に持ち帰って来たけど、垂仁天皇は既に崩御していたわよね？

建：常世の国をヤマトと見なし、垂仁天皇を始皇帝と見なせば、タジマモリは徐福に相当するだろ？その非時香果とは橘のことで、日本に自生している植物だし。

ひかり：あっ、秦とヤマトを「合わせ鏡」で逆に見ればいいんだ！だから、…アメノヒホコ→タジマモリとされる渡来順も逆に見れば良いわけね！

建：うん。また、タジマモリは垂仁天皇が崩御されていたことに、悲しみのあまり泣き叫びながら亡くなったというんだが、何か、気付くことは無いかい？

ひかり：確か、ギルガメッシュが不老不死の妙薬を手に入れたものの、蛇に奪われたので泣いた、という話だったわよね？

建：これには更に面白い話がある。

“ギルガメッシュとお供のエンキドゥが“神々の地”に辿り着く前、ギルガメッシュが水浴びしていると、その姿に欲情したイナンナがギルガメッシュを誘惑した。しかし、イナンナの浮名を知っていた彼は、早晩、彼女は自分を“足にまとわり付く靴”のように脱ぎ捨てるだろう、と言って、彼女が浮名を流した男たちの名を列挙し、彼女を拒絶した。この屈辱的拒絶に激高したイナンナは“天の牡牛”でギルガメッシュを打ち倒すよう、アヌに頼んだ。しかし、彼らはこの“天の牡牛”を打ち砕いたので、イナンナは彼女の住まいで嘆き悲しんだ。”

つまり、ギルガメッシュの話にもイナンナが密接に関わっていたんだ！

ひかり：ここでもイナンナなのね…。まあ、不老不死の概念自体がイナンナが根源だし。

建：ついでに言うと、葉付きの枝は「生命の樹」、果実付きの枝は「生命の樹」に生る実だから、知恵を悟ることの象徴さ。カバラに於ける不老不死とは、「生命の樹」の知恵を悟ることに他ならないからだよ。そして、「生命の樹」のセフィラは10個、隠されたダアトを含めると11個で、それがタジマモリの話の“10年”“第11代”で象徴されている。つまり、タジマモリの話は、「生命の樹」の知恵を悟ることを象徴したカバラでもある。

ひかり：深いわね…。

建：また、尾張氏の末裔は田島姓や馬場姓を名乗り、かつては但馬も丹波王国だった。つまり、タジマという言葉で海宮一族を暗示しているのさ。

ひかり：この徐福一団の経路も、アメノムラクモノミコト＝神武天皇の東征経路と似ていない？

建：そう思えるのは、徐福がアメノムラクモノミコトの時代に渡来し、その娘を娶ったからだよ。徐福こそが神武天皇である、という説も、同じ理由だったんだよ。

ひかり：しかし、和平を結んだとは言え、快く思わない者たちが反逆していた。

建：だから、この狭い国を統一する必要が生じた。こんな小さな島国で争っているのは共倒れになるからね。そこで最も重要なことは、祭祀だ。古代は何処の国でも政祭一致だからね。

ひかり：徐福系の不満を減らすために、彼らが持って来た銅鐸が祭祀に使われるようになったわけね。銅鐸については様々な議論があったけど、太陽神の分身だったとは…。

(4) 統一王国への道と新羅建国

縄文人たちは海の漁や山の狩猟を主な生活源としており、海辺に近い地域に集合村落ができていた。山には磐座があり、神聖な地域だったので、祭司などの特定の者以外、入ることは許されていなかった。祭祀を行うには神が降臨するための磐座や山が必要となるが、新たな統一王国の中心地として丹後は手狭だった。そのため、新たな開拓地が求められた。

丹後地方の山を越えた南方には、広大な湿地帯が広がっており、それは紀伊半島の山岳地帯の麓まで続いていた。また、徐福一団は稲と呼ばれる穀物を持って来ており、これはニビル由来の小麦とは違って純地球種だった。そして、小麦と同様、一粒植えれば収穫時に何倍にもなる優れた穀物で、特に湿地帯に適した穀物だった。これを栽培することにより、多くの人口が賄えるようになり、定住生活も可能となる。そこで、この列島の中心的位置でもあるこの湿地帯を開拓し、そこに新たな統一王国を造ることが決められた。

ナガスネヒコが彼らを導くことによって、できる限り小競り合いが避けられた。丹後地方の山を越えると、徐福が率いてきた技術者集団が湿地帯の干拓を進めた。彼らは秦帝国を建造した一級の技術者集団だった。その一派は秦に残り、始皇帝の陵墓を建造したのである。

最初彼らは、後に山城と言われるようになる地から、広隆寺が建てられる太秦一帯までを足掛かりの地とした。そして、すぐ傍にある列島最大の湖を遠い故郷のガリラヤ湖（豎琴の湖）に因んで“琵琶湖”と名付けた。この巨大な湖の水運を活用し、丹後の日本海側と太平洋に通じる東海地方との交易を盛んに行った。これにより、朝鮮半島から日本海を経て、太平洋までの経路が出来上がった。更に、木津川を上り、紆余曲折しながら、ようやく統一王国に相応しいと思われる土地に辿り着いた。

これと並行して、朝鮮半島との鉄鉱石の貿易をより確実にスムーズなものにするため、天宮一族の瓠公（ココウ）が徐福系の一団を率いて半島に渡り、彼らが通って来た日本海側の経路に国を造った。後の新羅である。更に建国後に

は、天宮一族と婚姻関係を結んだ徐福系の脱解尼師今が渡って、国王となった。

ひかり：徐福が稲を持って来たという噂は本当だったのね？

建：だから、海宮一族の近くには“伊根”という地名がある。

ひかり：お米は「八十八」と書くから、これに天神で豊穰神のヤーが加われば“888”となるわね！

建：徐福の居た秦帝国で、ようやく漢字は統一された。方士でカバラの使い手の徐福は、漢字の表意性、表音性に、更にカバラも付け加えた。

ひかり：つまり、今日に繋がる日本のカバラの大元は、この時代に始まると考えて良いわけね？

建：その通り！だから、王権のある土地の象徴でヘブライ語の“YHWH”を意味するヨッド（'）の形に加工した玉を勾玉と名付けた。“勾”の“勹”は“包む、とらえる”という意味、“ム”は“わたくし（私）”という意味で、“勾”は“私は在る”ということだからだよ。

ひかり：となると、…海宮一族は大王家で祭祀一族でカバラの使い手だから、言うなれば、八咫鳥のような存在なのね？

建：八咫鳥は秦氏だから、“元八咫鳥”だろうね。

ひかり：広隆寺から太秦にかけてはその八咫鳥の拠点だけど、その前は海宮一族が治めていたなんて、思いもよらなかったわ！

建：広隆寺では牛追い祭りという変わった祭りがあり、ただただ牛を追いやる。これは、物部氏の“物”という字が“牛に勿かれ”と書くことが暗示しているのだが、物部氏は牛を使って燔祭をやっていた。本来は、エルサレムの神殿でのみ行うべき、ということで、秦氏によって禁じられたんだよ。

ひかり：ということは、広隆寺は元々物部氏縁の地で、しかも、神殿に相当するような施設があったということかしら？

建：広隆寺の“広隆”は道教由来の“黄龍”に通じるだろ？

ひかり：徐福は道教の方士とも言えるし、黄龍は地上の王を表すわ！

建：そして、有名な聖徳太子像がある。

ひかり：聖徳太子はイエスをモデルとした架空の人物じゃないの？

建：基本的にはそうだが、名前がイエスを暗示している蘇我馬子（我、馬やどの子として蘇り）だとも言える。その蘇我氏は、実は徐福系の子孫さ！

ひかり：蘇我氏は、葛城氏の子孫だと主張していたわよね？葛城氏の祖は徐福だから、それは本当だったのか…。

建：徐福は海宮一族となったし、ニギハヤヒとされたから大王とも言える。そして、正史では、聖徳太子は皇統の皇子とされている。広隆寺には他に、国宝第1号と指定された弥勒菩薩半跏像があるだろ？それは、新羅様式なんだよ…。

ひかり：それって…新羅は海宮氏が建国した国だから、…聖徳太子像で大元の王族を暗示しているわけね！？だから、陛下が大嘗祭後の即位式で召された黄檯染御袍が、この聖徳太子像に着せられるわけね…なるほど…。それに、アメノヒホコやタジマモリが新羅国王の子孫とされたのは、新

羅建国に海宮一族と徐福系が関わっていたからなのね…。それが神話では、高天原を追放されたスサノオが檀国に降臨した逸話に変えられた…。

建：そう、新羅は海宮氏・徐福系を暗示する重要なキーワードなんだよ。新羅となる以前は辰韓＝秦韓だったが、秦の始皇帝の労役から逃亡してきた秦人の国とも言われている。ならば、一旦秦に帰国した後、朝鮮半島を経由して九州に再上陸した徐福一団を“秦の始皇帝の労役から逃亡してきた秦人”と見なせば良いわけだ。

ひかり：熱田神宮にある草薙神劍がかつて新羅の僧に盗まれたという話があるけど、それは…

建：神器は特定の氏族にしか扱えないという暗示。新羅建国に関わったのは海宮氏だからね。その盗まれたという話は、劍の写しを造るために一旦、秦氏によって没収されたということだよ。それを、新羅の僧が盗んだことにした。

ひかり：しかし、国史的には、新羅はあまり良い扱いを受けていないのは…

建：海宮一族の真相を封印するためだよ。海宮一族が後に鬼や土蜘蛛など、異形の者とされたのも同じ事さ。

(5) 邪馬台国（前期邪馬台国）建国

統一王国に相応しいと思われる土地に辿り着いたものの、そこは山間地だった。そのため、平地のような田は作れないので、開墾して段々畑のような狭い田やどちらかの方向に長い田が作られた。

また、建田勢命（タケダセノミコト）の時代、半島経由で大陸から銅鏡が伝えられた。その中の重要な鏡は、光を当てると反射した像に鏡面の模様が浮かび上がる魔鏡だった。特に重要だったのは一対の大きさの異なる鏡で、物質世界の基本原理である鏡像反転の原理を暗示し、カバラの根本原理とも言える「合わせ鏡」となっている息津鏡・辺津鏡である。「合わせ鏡」の像は無限に続いているような錯覚を与えることから、“永遠”“不老不死”をも暗示する。

祭祀としてはまだイナンナを最高神として祀っており、イナンナには太陽女神としての性質があったものの、男神を太陽神とする徐福系との争いがあちこちで発生していた。そのため、特に重要な一対の鏡を太陽神の分身として、天叢雲劍と共に二璽神宝とすることが検討され、新たな祭祀の準備が整いつつあった。

そして、続く建諸隅命（タケモロズミノミコト）を経て、次の倭得魂命（ヤマトエタマノミコト）の時代に、ようやく統一連合国としての形態が整った。ここまでは地球の主エンキ、イナンナ、ウツを重ねて“ヤー”として祀っていたが、実質の最高神は女神イナンナだった。そのため、男王が祭祀王として仕えていた。

しかし、その次の代、意富那比命（オオナビノミコト）が大王となるのと同時に、ヤーを三神に分離し、エンキを海神、イナンナを豊穰神、ウツを太陽神として祀り、最高神は太陽神と決められ、太陽神の分身が息津鏡・辺津鏡、依り代が天叢雲劍とされ、それまでの祭具だった銅鐸は破棄された。そして、男神の太陽神を祀るため、神懸かり的な力を秘めた姉の卑弥呼が巫女女王として

君臨することとなり、ようやく連合国家が誕生した。その国の名は、ヘブライ語で“神の民”を意味する“ヤマトウ”の国である。これが支那の書では“邪馬壹国”と書かれた。

その場所は、現在の宇多川に分岐した泊瀬（初瀬）、上の郷付近で、深めの笠のように整った円錐形の山である都介野（つげの）岳を神が降臨する山とし、その神山を祀るための場所が小夫（おうぶ）である。

しかし、連合国家とはいえ、それはこの付近に限定されたものであり、特に狗奴（くな）国との争いは絶えなかった。

.....
ひかり：卑弥呼の邪馬台国は纏向ではなく、泊瀬の上の郷付近だったのね！

建：纏向はその時、まだ湿地帯だった。だから、そこを干拓して開墾する前の土地として、ここが選ばれた。そして、当時はまだ争いが絶えなかったから、最初から一気に統一国家を造る予定ではなかったんだよ。日本書紀には、天照大神が天邑君（あめのむらのきみ：天上界に於ける村の長）を定め、天狭田（あめのさなだ）と長田（ながた）を作った、とある。このような山間地では平地のような田は作れないから、この天狭田と長田は泊瀬付近の山間部に最初の王国ができたことを暗示しているのさ。

ひかり：その“上の郷”は“神の里”と同義ね？

建：上の郷と同じ地名が他にもあるだろ？

ひかり：内宮別宮の伊雑宮！本来の神宮は、封印された伊雑宮だから、“かみのごう”という地名で本来の場所を暗示しているわけね？

建：ご名答！泊瀬の上の郷には白木という地名があり、伊雑宮のある志摩にも白木という地名があるから、出来過ぎだね。それに、日本地理志料に依ると、小夫には斎宮山があり、天照大神を祀る天神社があって、これを笠縫邑の伝承地と称して元伊勢と伝えている。これからも、都介野岳という神山を祀るための場所が小夫だと言える。

更に、都介野岳の西側は小山戸という地区だが、かつては“おうやまと”と呼ばれていた。“大いなるヤマトウ”の意味だが、“小”を“おう”と読ませているのは、この最初の統一国家の王であるオオナビノミコトに因み、それが後に美称の“おう”“おお”とされ、警蹕（けいひつ：御神体を遷す遷御の際や天皇陛下が公式の席で着座・起座される際、行幸時に殿舎等の出入りされる際、天皇陛下に食膳を供える際などに、周りを戒め、先払をするために側近者の発する声）とされたんだ。

ひかり：たった一言の“おう”にも、それだけの意味が隠されていたんだ…。

建：他にも、小夫の南に接した滝倉には神山の瀧蔵山があり、イザナギとイザナミを祀る瀧蔵権現社があり、上の郷には古代祭祀にまつわる古社や伝承が多いんだよ。

ひかり：息津鏡・辺津鏡こそ、卑弥呼が神事で使い始めた鏡だったとは…それに、「合わせ鏡」にも深い意味があるのね？

建：だからこそ、卑弥呼一族の子孫である海宮一族が、代々手渡しで継承してきたんだ。そして…八咫鏡のオリジナルでもある！

ひかり：今まで、誰も見破れなかったわね？

建：へブライ語が書かれた鏡だとばかり思われていたからね。

ひかり：鏡が太陽神ウツの分身で、剣が依り代だけど、剣はイナンナの依り代でもあるのよね？

建：イナンナには太陽女神的性格があるから、いずれも太陽神の依り代と言える。それに、イナンナは戦いの女神でもあるしね。

ひかり：そうすると、残りの勾玉はエンキの？

建：山幸彦が海神ワダツミノカミの所に行った時、海神の娘トヨタマヒメの侍女が持っていた水の入っていた壺に、自分の首飾りに付いていた勾玉をとって口に含んで壺の中に吐き掛けたところ、勾玉は壺にくっついて離れなくなった。

ひかり：つまり、勾玉は海神縁ということね。ところで、神山とされた都介野岳のある一帯の地名は都祁で、新羅の都祁野を連想させるんだけど…何か関係があるの？

建：大ありさ！新羅の延鳥郎（ヨンオラン）と細鳥女（セオニョ）の逸話が暗示している。

“第8代・阿達羅王の即位4年（AD157年）の丁酉の年のこと。東海の浜辺に延鳥郎と細鳥女がおり、夫婦で暮らしていた。ある日、延鳥郎が海中で海藻を採っていると、突然岩（魚の場合もあり）が出現し、延鳥郎を乗せて日本に帰った。日本の人は

「これは並みの人ではない」

と言い、王に擁立した。

細鳥女は夫が帰って来ないのを不審に思い、夫を探し求めた。夫の脱いだ鞋（わらじ）を見つけると、彼女もまた岩に上った。岩はまた前のように細鳥女を乗せて日本に帰った。日本の人は驚き怪訝に思い、謹んで王（延鳥郎）に細鳥女を献上した。そして、夫婦が再会することとなり、細鳥女は后とされた。

この時、新羅の太陽と月は光を消してしまった。日官（イルクワン）という予言者が（新羅の）王に奏して言うには、

「日月の精は、降臨して我が国に在った。しかし今、日本に去ったので、この不思議な現象に到った」

と。新羅王は使者を派遣して2人を探した。延鳥郎が

「私がこの国に到ったのは、天が然るべくさせたものである。今どうして帰ることができようか。だが、私の妃が織る薄絹があるので、これを持ち帰って天を祀ると良いだろう」

と言った。

使者はその薄絹を持ち帰り、新羅王に事の仔細を奏上し、延鳥郎から言われた通りに薄絹を奉じて天を祀った。すると間もなく、太陽と月は元に戻った。そして、その薄絹を国宝として国王の倉庫に収納し、その倉庫を貴妃庫と名付け、天を祀った場所を迎日県、または都祁野と名付けた。”

この場合の新羅とは、BC2世紀末からAD4世紀にかけて存在した辰韓のこと

だが、アメノヒホコの逸話とそっくりだろ？

ひかり：記紀では男が女を追って渡来したことになっていて、「合わせ鏡」？

建：ああ。そして、絹を持って帰る話は、日本書紀に登場する。ここでは新羅が任那に変えられ、新羅が悪者扱いなんだ。

“ツヌガアラシトは崇神天皇の御世に加羅＝任那から渡来し、垂仁天皇に3年仕えた後、帰国した。その際、垂仁天皇から赤織の絹を賜って帰国し、自分の国の蔵に収めて大切に保管したが、新羅人がそれを聞いて兵を起こしてやって来て、その絹をすべて奪って行った。”

いずれにしても、日本と朝鮮半島に同じ話が伝承されていた、ということで、アメノヒホコ伝承が基なのさ。

ひかり：延鳥郎と細鳥女の話は、年代的にはどうなの？

建：脱解王が新羅の第4代の王（在位はAD57年～80年）とされているので、この話はその4代後だ。延鳥郎は日本の王になったわけだから、それは海宮一族の暗示で、新羅では太陽とされている。ならば、この延鳥郎に相当する人物こそ、銅鏡を伝えた人物だ。大倭神社注進状裏状に依ると、ヒホコとは鏡のこととあるし、アメノヒホコの血統のタジマモリ、その兄弟とされている清日子（キヨヒコ）の別名を持つタケダセノミコトその人の可能性が高い。

ひかり：ツヌガアラシトの話に登場する“赤織の絹”は？

建：“赤”は古代に見られた瑞兆の象徴で、火の鳥＝フェニックス＝不老不死に由来するもので、海宮氏の象徴なんだよ。また、海宮氏一族の大海人皇子は壬申の乱の際、赤い色を旗印とし、天武15年には“朱鳥（あかみとり）”という元号が立てられたことから、“赤”は“新羅人”と合わせて海宮氏を暗示しているんだ。

後から渡来した原始キリスト教徒の秦氏は、イエスは白い鳩と関わりが深いから、“白”となる。

ひかり：けど、そうすると、日本武尊は白鳥伝説があるから、秦氏なの？それに、平家は赤で源氏は白だから、平家は海宮系で源氏は秦氏系なの？

建：それは逆なんだよ。

ひかり：ということは、「合わせ鏡」ね！

建：日本武尊の真相は瀛津世襲命（オキツヨソノミコト）で、卑弥呼の時代の海宮氏一族。源氏は義経の鴨越が有名なので、騎馬系のようにも思われるが、実は海人系で、頼朝の母親は熱田神宮宮司の娘なんだよ。

ひかり：なるほど、一筋縄ではいかないわね。でも、何故、延鳥郎にも細鳥女にも“鳥”という字があるの？やっぱり、八咫鳥を中核とする秦氏系じゃないの？

建：八咫鳥の元の話は支那だ。太陽には鳥が住み、10個の太陽がそれぞれ天を駆け巡って1つの旬を形成すると考えられていたが、ある時、太陽が一度に天に現れて地上は灼熱と化し、天帝に命じられた弓の名手が9個の太陽を射落とすと、9羽の“金の鳥”が落ちてきて、足が3本だったという話が、春秋戦国時代の「楚辞」に書かれている。これは統一国家の秦帝国ができる以

前の話。

ひかり：そうすると、道教の方士たる徐福が持って来た話としても矛盾はしないわけね。

建：鳥と太陽の関係はこれだけではない。シュメールのメソポタミアでは、聖書に於いて、大洪水後のノアの方舟から地上の偵察として初めて外に放たれた動物で、水が引いたことを知らせた。大洪水後に水が引いている状態は空が晴れ上がっている状態だから、大地に太陽光が降り注いでるわけで、太陽関係だ。エジプトでは太陽の鳥とされ、ギリシャでは太陽神アポロンに仕える鳥だった。つまり、鳥は太陽とは切っても切り離せない関係で、八咫鳥のオリジナル、というわけではない。

ひかり：だから、延鳥郎と細鳥女の逸話を、新羅と邪馬台国建国の中樞にいた海宮氏の暗示と見なしでも問題無いわけね…。

建：秦氏の中核である原始キリスト教徒が、元々あった鳥伝承に重ねて、自分たちを八咫鳥と称した、ということさ。

ひかり：ある意味、徐福系を含む海宮氏一族は“元八咫鳥”とでも言うべき存在なのね？

建：その通り！で、話を戻すと、新羅で天を祀った場所を都祁野と名付けたことは、実は新羅建国に関わった海宮氏を暗示する。ヤマトでは邪馬台国、朝鮮半島では新羅を建国したから、逸話が新羅になっても良いんだよ。言い換えれば、卑弥呼の邪馬台国は都祁野と呼ばれる地域に存在した、ということのを仄めかしているわけさ。

ひかり：学者でそんなことに気付いた人は誰もいないわね！

建：そりゃ、真相を紐解くための鍵、つまり、カバラや「合わせ鏡」、シュメールを知らないからね。

ひかり：都介野岳が深めの笠のように整った円錐形の山なのは、何か偶然ではない気がするけど…。

建：なかなか感が冴えて来たね…。この山の北の麓には柏峰という小山が、山頂には水平に均した方形の台地があり、北の麓には国津神社があつて、柏峰を御神体としている。周髀算経には“笠を以って天の形を写す”とあり、“天は青く、地は黄色く赤い。そこで丸い笠型の表面を青黒に、裏面を丹黄にすれば、これによって天と地の位置を象徴する”とある。よって、笠型の都介野岳は天の祭壇、方形の柏峰の台地は地の祭壇となる。そして、“天は円に通じ、地は方に通じる”とされ、古代支那では“冬至には円丘に至りて天を拝み、夏至には方丘に於いて地を拝”み、これを“二至（にし）の祀”と呼んだが、都介野岳と柏峰はまさにこの関係になっている。つまり、両所で合せて天神地祇を祀っていたということさ。

ひかり：単に、1つの神山だけを見ているも駄目なわけね…。

建：更に、柏の葉は新芽が出ないと古い葉が落ちないから、“子供が産まれるまで親は死なない＝家系が途絶えない”という縁起に結び付け、子孫繁栄の象徴とされて、5月の節句は柏餅で祝う。そうすると、都介野岳＝天神と柏峯のセットで、“天神の未来永劫の繁栄”となり、“天神の子孫の未来永劫の繁栄＝永遠、不老不死”をも象徴するのさ。

ひかり：出来過ぎな配置ね。

建：“柏木”という姓も、元々は“神聖なる柏の木”という意味から、皇居を守る兵衛、衛門の別称だった。つまり、皇居＝天皇＝天＝天神＝都介野岳を守るのが柏峰、ということだよ。

ひかり：“天は青く、地は黄色く赤い”ことからすると、“黄色く赤い”色は丹（に）色だから、他にも意味が隠されている気がするわ…。

建：丹色は不老不死の妙薬とされた丹生（にゅう＝硫化水銀）のことだよ。だから、“青”は“天”、“丹”は“地”を象徴するということ。

ひかり：“青”と“丹”が合わさった“青丹よし”は“奈良”に掛かる有名な枕詞よね？

建：つまり、後の歌にも登場する“青丹よし 奈良”という真意は、“天と地が良く調和する素晴らしい奈良”という意味であって、無意味な枕詞ではないんだよ。そして、俗説で言われる“奈良”が朝鮮語で“国”を意味する“ナラ”ならば、“天と地が良く調和する素晴らしい国”という意味にもなる！

ひかり：啞然としちゃうわ…。

建：さて、都介野岳の山頂中央には、円形の列石が置かれている。円形列石＝ストーンサークルは古代祭祀の典型例で、世界各地に存在するストーンヘンジはニンギシュジツダが考案し、ニヌルタとイシュクルが建造を手伝ったことは、以前に話したよね？

ひかり：日本にもその足跡が残っているということね？ということは、…柏峰との関係などからしても…都介野岳はひょっとして人工の山、ピラミッド？

建：（微笑む。）

ひかり：ピラミッドの設計者はニンギシュジツダですものね！

建：その都介野岳の中腹には、堂ヶ平という祭祀遺跡の反対側の尾根に、約 40メートルに亘って岩石を積み上げた遺跡がある。それは、高さ約 8メートルの主丘の裾に陪冢（ばいちょう）を控えた墳墓なんだ。その上部は穴が開けられて盗掘されているが、弥生後期の巨大な墳墓であることはほぼ間違いない。しかも、聖なる山の中腹という位置からすると、この時代の特別な貴人の墓と言える。

ひかり：卑弥呼の墓でしょ！？

(6) 大邪馬台国（後期邪馬台国）建国

卑弥呼が女王となる前から、現在の纏向付近の開拓が開始され、また、オキツヨソノミコトが中心となって、伊勢や尾張地方などが統一国家へと組み込まれていった。

国造りは順調に進んではいたが、卑弥呼亡き後、乎縫命（オヌイノミコト）が祭祀男王として就任し、最高神もイナンナへと戻された。それにより大混乱が発生し、多くの者が死傷した。あわや、国を二分しての大戦乱となる寸前、卑弥呼の宗女で孫の世代にあたる 13 歳のトヨが新たな巫女女王として擁立され、小登與命（オトヨノミコト）が彼女を補佐する大王となった。そして、最高神も太陽神ウツに戻され、先祖の卑弥呼も太陽女神として共に祀られることにな

った。また、その頃には纏向付近の開拓が終わり、現在の近畿～中部地方一帯まで組み込まれ、ここに於いて、ようやく統一国家と言えるものが誕生した。大邪馬台国である。

新たな神山として泊瀬山が選ばれ、その遥拝所はダンノダイラと決められた。そして、海宮氏の兄弟分家である尾張氏と共に祭祀を営む徐福系の葛城氏の一族が出雲族と称し、それに因んでダンノダイラや纏向周辺には“イズモ＝出雲”を冠する地名が付けられた。

.....

ひかり：卑弥呼亡き後、国が乱れたというのは、最高神が変えられたからね？
建：古代で最も重要なのは祭祀だ。そこで、国が大混乱するほどのことが起きたのなら、それは祭祀に関わること。女神は男王が祀り、男神は巫女女王が祀った。卑弥呼亡き後、男王が立って国が混乱したのなら、それは祀る神を女神に変えたからなんだよ。

ひかり：なるほどね、それなら誰でも納得できるわ。
建：その時、偶然にも卑弥呼に匹敵する能力の持ち主が一族の少女トヨとして存在したので、子供ながら女王に擁立されたのさ。

ひかり：そう言えば、神宮の御遷宮で重要な神事には、必ず物忌童男か童女が携わっていたけど、それはトヨの大邪馬台国の祭祀が大元なのね？

建：その通り！神宮の父が娘を補佐するという形態だ。明治以前、神宮では物忌童男と童女が御饌を奉り、特に重要なのは、童女の大物忌が心御柱に対して神饌を供え、御遷宮での心御柱の立て始めの役割を担ったことだった。

ひかり：つまり、神宮では邪馬台国の祭祀が連綿と受け継がれていたのね？
建：ああ。だけど、それに気付いた人はほとんどいなかった。

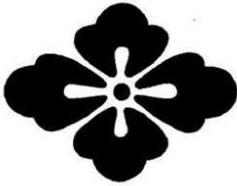
ひかり：ということは、卑弥呼も神宮で祀られているわけ？
建：神宮の御紋は、住吉大社のものとそっくりだ。住吉大社では、祀っている神功皇后が新羅遠征の際、身にまとっていた鎧に付けていた御紋、という伝承となっている。

ひかり：神功皇后のモデルは、日本書紀の一書にも仄めかされているように卑弥呼だから、御紋で卑弥呼が祀られていることを暗示しているわけね！

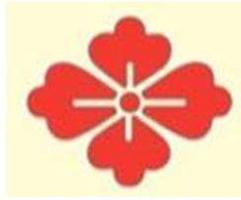
建：あの御紋に秘められた意味はそれだけではない。御紋は花菱と言うが、菱形の楔形文字はウツとイナンナのシンボル。4枚の花弁は神の戦車メルカバ一だ。そして、良く見ると、中心が丸で、花弁を貫くように十字がある。秦氏が渡来したところで詳しく話すが、十字はイエスの掛けられた十字架で、丸に十字は日本を暗示する！そして、丸を拡大すれば島津家の御紋だが、海神ポセイダンのシンボルでもあり、占星術では地球のシンボルでもあるから、地球の主で海神のエンキをも暗示している！

ひかり：そんなに様々なシンボルが重ねられていたなんて…もう、何も言えなくなるわね…。

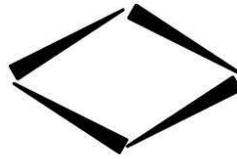
神宮



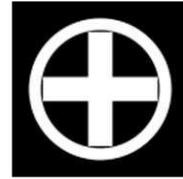
住吉大社



ウツ、イナンナ



島津家



建：オトヨノミコトはトヨを暗示した名前だが、亦名が御間木入彦命（ミマキイリヒコノミコト）で、崇神天皇と同じ。その崇神天皇の諡号は“ハツクニシラス”で神武天皇と同じなんだよ。

ひかり：そうか、それはオトヨノミコトの時代にトヨを女王として、ようやく日本国の大元が建国されたということを示しているわけね！

建：崇神天皇の時代に天照大神の祭祀が宮中以外の場所で行われるようになったが、ある意味、それまでは大物主神の祟りなどの話ばかりで、天照大神の神祭りはほとんど出てこない。言わば、ここで初めて、天照大神の神祭りが正史の表舞台に登場し、ここから本格的な祭祀が始まったとも見なせる。ところで、オトヨノミコトは熱田神宮の上知我麻（かみちかま）神社で祀られているだろ？

ひかり：初恵比寿で有名な？

建：恵比寿は蛭子＝ヒルコで、イザナギとイザナミの国生みの際、最初に生まれたけど骨が無い奇形なので流された神。

ひかり：つまり、王権を奪われた一族という暗示ね？

建：その上知我麻神社は東を向いており、熱田神宮の本宮と別宮は南を向いている。南北向きは秦氏が渡来してからのなんだが、それ以前は東西向きだったんだよ。

ひかり：つまり、上知我麻神社の祭神と向きで、大邪馬台国の真相を暗示していたのか…。

建：何と言っても、熱田の尾張氏は海宮一族の兄弟分家だからね。偉大な先祖を祀るのは当然だよ。

ひかり：熱田の本殿では建稲種命（タケイナダネノミコト）と宮簀姫（ミヤズヒメ）を祀っているわよね？

建：いずれもオトヨノミコトの子だが、建稲種命は“稲の種＝粳”で豊受大神を象徴し、ミヤズヒメの“ミヤズ”は豊受大神を主神とする海宮一族のお社が鎮座する“宮津”に通じる。

ひかり：つまり、いずれも豊受大神を暗示しているわけね。

建：そして、神器は元々持つべき氏族以外には許されないから…

ひかり：草薙神剣は、オキツヨソノミコトこと日本武尊が倭姫から譲り受けたことにされたのね？

建：その剣を依り代とし、鏡を分身とする祭祀が本格的に始まった。天叢雲剣

は陰で、象徴的には陰である水や雲、雨だ。

ひかり：葛城も、月に生えるとされる想像上の木“桂木”だから、陽の太陽に対して陰だわ。しかし、何故、その一族が“出雲”なの？

建：出づる雲は太陽を隠す。太陽神の真相は海宮氏にある。後で話すが、出雲一族には血の悲劇があり、それ故、丁重に祀られることとなり、本来の太陽が隠された。

ひかり：そうすると、“出雲”は後から付けられた名称なわけね…。

建：現在、出雲村がある一帯のダンノダイラ付近だが、ここには遥拝所の印でもある巨大な磐座がある。その磐座を泊瀬山に見立て、泊瀬山を影向したんだ。つまり、柏峰から都介野岳を拝する卑弥呼の邪馬台国と同じ構造なんだよ。

ひかり：じゃあ、大邪馬台国では、卑弥呼を祀ったの？

建：ダンノダイラを遥拝所として巻向山越に、見えない泊瀬山を遥拝したんだが、それと同様な構造を取った。すなわち、元兵主（もとひょうず）神社を遥拝所として斎槻岳越に、見えない卑弥呼の邪馬台国の神山である都介野岳を遥拝したんだよ。

ひかり：元兵主神社って？

建：応仁の乱で焼失した、穴師坐兵主神社（あなしにいますひょうずじんじゃ、兵主神社、穴師上社）のことさ。現在は、かつての穴師下社だった大兵主神社に、穴師兵主神（アナシヒョウズノカミ）、若御魂神（ワカミタマノカミ）、大兵主神（オオヒョウズノカミ）が祀られているが、正一位の宣旨を賜った最高の社格をもつ大和一の古社と言われている。アナシヒョウズノカミは、天祖降臨の際の三体の鏡の一体を御神体とする御食（ミケ）津神で、生産と平和の神、智慧の神でもあり、倭姫命が創建されたとされる。

ひかり：それは豊受大神、イナンナそのものね？

建：そう、鏡を御神体とする豊受大神ならば、海宮一族の祀る社と同じ構造だよ。何と言っても、海宮氏の祖の倭姫だしね！そして、ワカミタマノカミは稲田姫命（イナダヒメノミコト）のことで、御神体は勾玉と鈴で、芸能の神として崇敬を受けられている。

ひかり：ということは、“稲田”は御食津神だし、鈴と芸能の根源はアメノウズメノミコトだから、これもイナンナね？

建：この“若”は、シュメールにあった元初最高の神々の宮殿である天の少宮（わかみや、小宮）に由来するんだよ。そして、オオヒョウズノカミの御神体は剣（ほこ）で、武勇の神で相撲の祖神。

ひかり：そうすると、鏡、勾玉、剣で三種の神器が揃うわ！

建：だから、大邪馬台国の祭祀場に他ならない！

ひかり：けど、ヒョウズノカミって、聞いたことないわ…。

建：支那の史記に登場する神だ。山東地方で祀られていた天主、地主、兵主などの八神を始皇帝が祀ったのが初めて、漢の高祖が兵を挙げた時、兵主神の蚩尤（シユウ）を祀って勝利を祈った。支那では、蚩尤は魔を払う半人半獣の守護神で、両鬚は逆立って剣の切っ先のように鋭く、頭の真ん中には角が生えており、砂と石、一説には鉄鉱石を食べていたらしい。ならば、蚩尤は

製鉄を暗示している！鉄を制したものが武力を制したので、まさに兵の神、兵主神となる。そして、邪馬台国時代の朝鮮半島に於ける製鉄の中心は辰韓＝新羅と弁韓＝伽耶で、海宮氏が新羅を建国したから、日本海を挟んで新羅からヤマトへ鉄が流入し、ヤマトに於ける中心が兵主だった、と言える。

ひかり：なるほど！始皇帝が関わっているのなら、その系統の葛城氏が祭祀に関わっていたのは当然ね！けど、何故、剣を“ほこ”と読ませているの？

建：本来の金属製の剣ではなく、木でできたアロンの杖だからだよ。それに、アメノヒホコを暗示し、それは取りも直さず、大邪馬台国では海宮氏だけではなく、徐福系＝葛城氏も祭祀に加わることにより国が統一され、それを暗示しているのさ。そして、ヒョウズノカミにより、鉄剣をも暗示している。誰かが、三種の神器はユダヤの三種の神器と決めつけたけど、そうではなく、鏡、剣、勾玉は明らかに存在しているんだよ、神器として。

ひかり：元兵主神社は重要なのね…。

建：現在、穴師下社とされるのが大兵主神社だが、そこと箸墓古墳の中心線を延長すると、兵主神社跡（元兵主神社、穴師上社）と斎槻（いつき）岳に達する。このラインと東西ライン（箸墓－桧原神社－泊瀬山ライン）の角度は約22度だが、このライン上から太陽が昇るのは夏至の約1ヶ月前後で稲の播種の時期で、故に、“夏至の大平”と言われる所以でもある。ここからも、奈良盆地を埋め立てたり干拓し、稲作を基盤とする国家体制を築いたことが伺える。現に、古墳は墳墓とされているのだが、実は古墳の周囲に張り巡らされている周濠は広範囲の灌漑用水として利用されていたことが解っており、古墳造成期と平地での稲作普及の時期が一致しているのさ。

ひかり：単なる墳墓ではなかったわけね？

建：そういう先入観が、真相を見えなくしていたんだよ。また、下社から上社に昇る古道は天皇坂と呼ばれていた。“天皇”を当てているけど、海宮氏由来なので、本来は“天王”なんだ。そうすると、古代の大王は祭祀王だから、大王が歩いて行く坂道が天王坂で、元兵主神社のあった水平な方形（＝天に対する地）の台地から、斎槻岳を通じて天神の都介野岳を遥拝していたという祭祀形態が浮かび上がる。

すなわち、都介野岳を遥拝するのは元兵主神社で、言わば、元桧原神社でもあるんだよ。邪馬台国と大邪馬台国は別の国ではなく、邪馬台国の発展系が大邪馬台国だから、大邪馬台国での祭祀は邪馬台国での祭祀も直接受け継いでいるのは当然さ。更に、笠縫邑の伝承地と称して元伊勢と伝えられ、斎宮山があり、天照大神を祀る天神社がある都祁野の小夫が、これらの大元と言えるんだよ。

ひかり：邪馬台国論争では、みんな祭祀について無視していたけど、古代は祭祀が最も重要だったから、御祭神や神社の配置がとても深い意味を表していることに気付かなければならなかったわけね？

建：そう。出雲に関わる話として、日本書紀に登場する丹波の氷香戸辺（ヒカトベ）という巫女が皇太子・活目命（垂仁天皇）に次のように言ったんだ。

「私に子供が言います、出雲人の祈り祭る本物の見事な鏡、力強く活力を振る

う立派な御神の鏡をもって祭れ、出雲人よ」
 と。これは、私の子に神が乗り移って言うのであろう。このことによって、出雲人は神祭りを許した。”

これなんか、出雲人＝葛城氏が祭祀に加わっていたことの典型的な象徴だが、誰も見向きもしなかった。

ひかり：解るところに堂々と隠しているわけね…。つまり…大邪馬台国では元兵主神社での祭祀は海宮氏直系のみが担当し、ダンノダイラでの新たな祭祀は秦氏に素直に従った徐福の系等の葛城氏（出雲氏）が加わり、葛城氏が中心となって祭祀を行っていたと考えて良いわけね？

建：(頷く。)

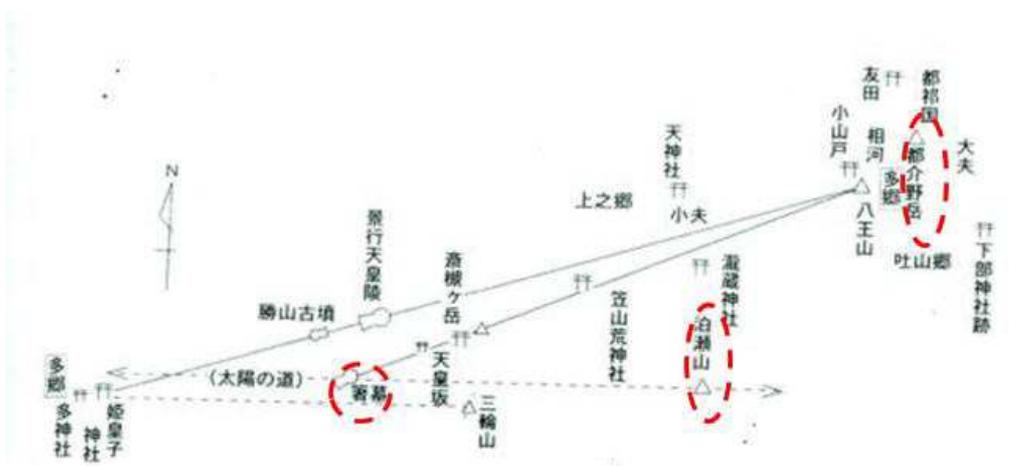


図36 二つの多郷を結ぶ景行陵・勝山古墳の中心線と蒼墓の中心線

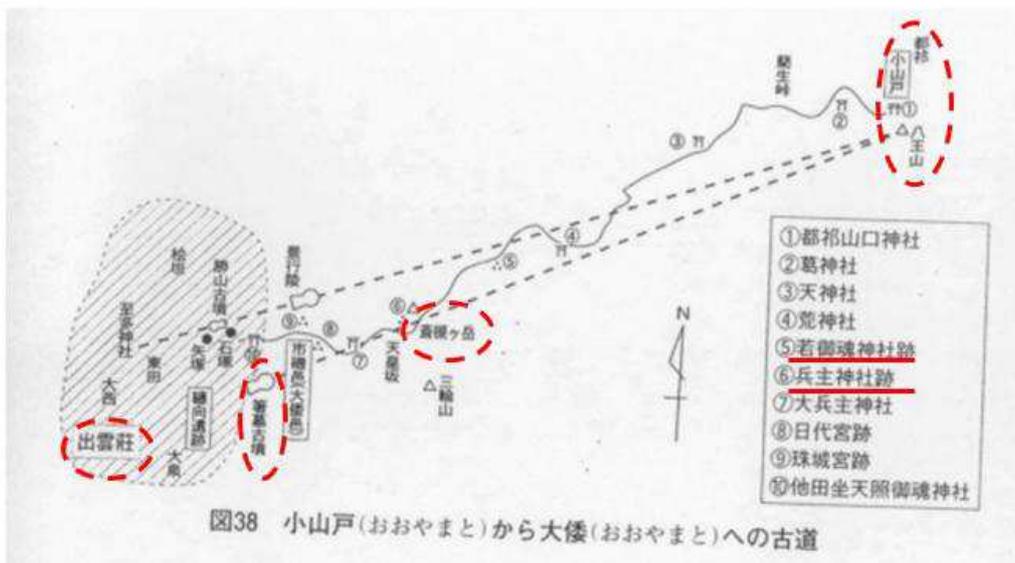


図38 小山戸(おおやまと)から大倭(おおやまと)への古道



そうこうしている内に、夜も更けていた。この日は、古代日本の相当深い真相まで扱ったので、気付かない内に、ひかりはかなり疲労していた。

建：相当お疲れのようだね？

ひかり：聴いているうちは気にならなかったけど、こうやって一息つくと、どっと疲労感が出てきちゃった…。

建：じゃあ、続きはまた明日ということにして、今日はもう休もう。風呂にでもゆっくりつかって、疲れを癒すとしようか…。

ひかり：(頷く。)

翌朝、かぐわしいコーヒーの香りで目が覚めた建。香ばしい天然酵母発酵の全粒粉のパンに、一番搾りのメープルシロップが添えられている。

建：早く起きたんだね？

ひかり：あなたに、滅多に手に入らないエチオピアのコーヒーを楽しんでもらおうと思って。私も、ドリップの腕を上げたのよ！

建：エチオピアはコーヒー発祥の国だね。

ひかり：確か、アフリカでも稀なクリスチャンの国よね？

建：じゃあ、イエスの話でもするか。

4：弥生時代前後の中東

(1) イエスの誕生

十支族が中東から消え失せ、バビロニア帝国が崩壊し、ペルシャ、シリアの支配を受けた後、古代ローマ帝国領となっていた時代のこと。神々は滅多に姿を現すこと無く、人心は腐敗し、エルサレムの神殿では男娼や神殿売春、金貸しが横行していた。ちょうどその頃、長楕円軌道を運行するニビルが、またしても地球に接近していた。それにより太陽と地球の波動が乱れ、人々の心に大きな影響を及ぼしていたのである。この時の接近は、大洪水を引き起こすほど